

「現地を訪問して想うこと」

下田 剣吾

2004年政策科学部卒業

参加コース D 福島県会津コース

福島（会津）はうまいものに溢れていた。酒蔵ではコメのうまみがこれでもかと思った日本酒をいただいた。蔵の中はものすごく冷えていたが、その寒さがうまいものを作る。震災前から、有機農法に取り組む産直にも寄らせていただいた。産直のお母さんは原発事故の影響で、消費者にいくら説明しても、今までどおりにはいかない辛さを抱えていた。私たちにふるまってくれたのは、口の中でとろりと溶ける里芋をグツグツと煮込んだ「芋煮（いもに）」である。都会のスーパーで買う里芋は固いものやボソボソした歯触りのものがあるが、手作り味噌で野菜とともに煮込まれた芋は、今思い出しても、おいしい。会津磐梯山が見えるその美しい畑ではキャベツが輝いていた。収穫させていただいたキャベツはリュックに詰めて千葉の自宅に持って帰った。そのキャベツのうまいこと。千切りにしたキャベツは苦味などなく、甘い、ただただ甘い。その後ロールキャベツにして家族みんな堪能した。先輩の宿である東山温泉はなんとも気持ちの良いお湯だったし、料理もおいしかった。いわき市など浜通りにも行ったことがあるが、やはり福島県は素晴らしい所だ。多くの人に訪れてもらいたいと思う。

白虎隊にまつわる場所ではNHK大河ドラマ「八重の桜」の綾瀬はるかのポスターが貼られていて、バスで多くの観光客が戻っていた。店の女性に話を聞くと「震災前の半分くらいは戻ってきた、嬉しい」と言っていた。しかし、修学旅行生が大きく減ってまだ戻らないことが残念だと話した。

このツアーの間、頭の中はさまざまなことに思いを巡らせていた。特に心に重くのしかかかるとは、軽々しく発言したり、おもいつきで誰かと話したりすることができないという思いが大前提としてあるからだ。大切な故郷を原発事故で失った人、仕事を失った人、生活が変わってしまった人。そういう人がいるのに、自分には何も言えない。そんな思いになってしまう。他の話題や課題であれば、「ああじゃない」「こうじゃない」と話すことができるのだが、それができない。福島の話が少しずつ少なくなってきたのも、そんなみんなの心理があるような気がする。重くなる、だから別のことを考えよう、そんな感じだろうか。だから今回の研修の中で、震災後の苦しさなどについて、大学の先輩から、様々な話を聞いたときに、心は重くなった。どう考えればいいのかと。

県外に避難した家族と離れて暮らす先輩がいた。そこにはこの現実の厳しさをわかった上で、「自分がやらないでだれがやるのか」という使命感をもって仕事に取り組む姿を聞か

せていただいた。福島とうまいものを売り出して、生産者を応援しようという先輩は、さまざまな壁を乗り越え、今は「飲んで、食べて、旅をして応援してください」というキャッチフレーズで、ただ売るだけでなく、地域の未来を考えたプロジェクトを進めていた。こうしたことを聞くことができたことは私のこれからの勇気であり、希望になった。

原発事故が残した問題は大きすぎる。本当に大きすぎる。けども、私たちはこれから100年以上にわたってその問題やその後起きてくる問題と向き合わなければならない。そういう時に、その最前線に立って先輩が活躍しているというのは誇りだし、自分もできることをしなくてはならない。

去年いわき市に行ってから、今回の会津も含めて、妻や娘に、一緒に福島県に遊びに行こうと説得している。だが、なかなか返事は厳しい。東北出身の妻は福島の魅力は知っている。けど、その「重さ」も感じるらしい。同じお金を出して旅行するなら、わざわざ悩むところへは行きたくない、そんな感じだろうか。ひどい話だが、全国の消費者や観光客の正直な思いの一端は表している気がする。というわけで私は先輩の運営するネットショップ「福島屋商店」から、妻の実家に花束を送り、妻にもクリスマスの花を送った。芋煮をごちそうになった産直から野菜セットを取り寄せた。中に入っていた甘いキャベツで作ったお好み焼きは娘にとって大好物になったようだ。

福島のこれからについては、あまりの問題の大きさに、深刻さに、目を背けたくなくなることがあるかもしれない。けどその時に、私は先輩たちの姿を思い浮かべ、これからも考えていく。そして周囲の人が、福島の魅力を知り、その復興を支えていきたいと思うように行動していきたい。